



「有朋会」のさらなる発展を願って

有朋会会長 宮尾正隆

有朋会は、明治21年（1888）佐賀師範学校時代に設立され、昭和24年（1949）に佐賀大学教育学部、平成8年（1996）文化教育学部と引継がれた同窓会です。現在13,900名程で構成されています。皆様のご協力に感謝するとともに、今後とも、会の発展のために、ご意見ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

従来、11月に開催していた追悼会、総会、懇親会を本年度から変更して、総会と懇親会を8月31日（土）に、追悼会を11月17日（日）に開催します。なお、総会、懇親会の喜寿祝に合せて、還暦の方々も新しくお招きするようにいたしました。特に、会員の皆様方のご参加もお待ちしております。

ご承知とは存じますが、新制佐賀大学（佐賀大学と佐賀医科大学）10周年記念行事の一環として「美術館」が、本年10月に完成いたします。国立の総合大学での最初の試みで、地域との交流、大学の学部や研究科の成果との情報発信と交流、芸術・文化の振興を目的として、正門入口に建設されます。有朋会として、昨年2千万円を大学へ寄付いたしました。また、鳥栖基山や神埼、佐賀市北、東、西の5支部からも寄附をいただいています。

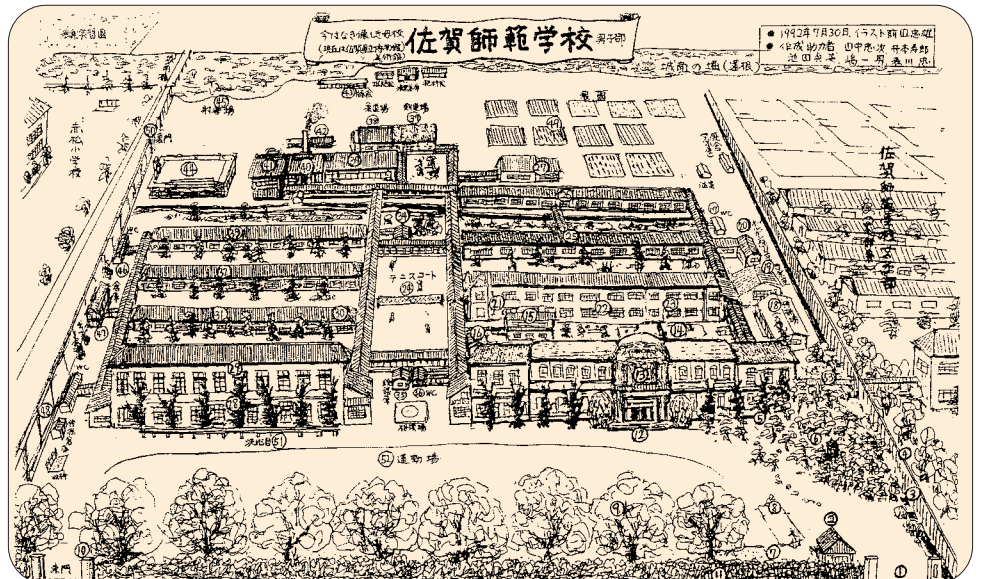
会員の皆様におかれまし

ては、出費多難の折とは存じますが、母校の発展のため、個人としてのご寄付をよろしくお願ひします。

美術館には、戦前の師範学校や旧制佐高の資料なども展示予定です。学生当時の思い出の資料や写真などがありましたらご連絡ください。また、ご遺族の方々でも、当時の資料をお持ちの方は、ぜひお知らせください。



▲地域交流活用のオープンミュージアムとして
本年10月会館予定の佐賀大学美術館の全景▲



▲S23年卒古賀英太郎・逸男氏の有朋31号原稿より、懐かしの佐賀師範学校全景▲



この頃思うこと

S37卒 武雄支部 中 村 公 茂

私は、最近、ことばの力というものが、いかに大切であるかということ、思うようになってきた。その一言が、自分にとっても相手にとっても、喜怒哀楽の情を醸しだし、また、生きる力や励みになることもある。

ところで最近、地域社会の中で、老若男女を問わず「ありがとうございます。」ということばを良く耳にするようになってきたのは、本当に嬉しい限りである。「ありがとうございます天使のことば」とある施設内に掲示してあったが、全く同感である。ありがとうございますのことばを聞くと、何となく心が和んでくるのを覚える。また、最近の若者は、仕事を頼んでも気持ちよく引き受けてくれるし、彼らが働く職場でも全力を尽くして仕事に励んでいる姿が目につく。対人関係においても相手の目線に立った対応をしているようなので、感謝の気持ちを伝えると、さりげなく「ありがとうございます。」ということばが返ってくることが多い。こうした若者たちを見ると、日本の将来に明るい光を感じると同時に、自分の落ち込んだ気持ちも癒される気持ちになってくる。

また、私は、時々、小学校などで授業参観をする機会があるが、廊下で出会う子どもたちも軽く会釈をしてくれるし、先生方も知識だけでなく、心の教

育という面にも、十分配慮して授業に取り組んでおられるのを見ると、自然に頭が下がる思いがする。こうした日頃の指導のせい、登下校の子どもたちのほとんどが、良くあいさつをしてくれるので、私も笑顔で返し、この子どもたちの未来に幸あれと祈らずにはおられない。最近、様々な機器などの発達とその使用によって情報化社会が形成され、いろいろな面で大変便利になってきたが、人間の心がこうした機器などに支配されないように気をつけ、主役はあくまで人間であることを忘れないようにしたいものである。

夜、眠れない時など、今日一日人々と接する中で、自分が発したことばを思い出し、あのことばでよかったのか、ほかに言いようはなかったのか、あるいはまた、相手の心を傷つけたのではないかなど、反省することしきりである。私の座右の銘は「人に学び自分に学ぶ」であるが、友人との会話の中で、また、情報化社会の中で得られる多くの事柄からもいろいろなことを学んでいる。

これからの残された人生を有意義なものにするためにも、自分の言動に常に反省を忘れることなく、ことばを大切にしながら、生きていきたいものである。



ここ最近 ゆとりのなかで思うこと

S51卒 白石支部 黒 木 善 宏

今年、37年の教職に区切りがついた。今考えるとあっという間のように思えてくる。これからは、ゆるやかな時間の中でゆっくり考えるのもいいと思うが、何やかやで結構忙しい。とりとめの無いことを二つ三つ書きとめる。

私が現職の頃、教育支援活動をされている先生が訪ねてこられた。「退職してから後の方が地域や教育活動にかかわる時間が現職の時より長くなるから貴方も何か考えとった方がいいよ。」と話された。そうですねとは言ったものの、なかなか行動に移せない自分に反省しきりである。

還暦を迎えて私の周りでは、やにわに同窓会と称して懇親会が頻繁に行われる。小学校の友との再会もあれば、高校の友との再会もある。不思議と中学校の会はない。よく考えると我々が入学した中学校は、四つの小学校が完全に統合した

年であり、当時は各小学校100名を超える児童がいた。全体では、1学年500名近くいたように思う。中学校よりも小学校の結びつきが強い時代であったからだろう。小学校の友との同窓会の時「今の小学校は人数が少なく、小学校単位では同窓会も開けんようになっていくかもね。」と話していた。少子化の波が同窓会にも影響してくる。これからは中学校の結びつきが強くなることだろう。50年前までの小学校校区は、どこもハード面では小中連携の時代であったように思う。大抵の小中学校は同じ敷地に隣接していた。我母校も廊下づたいに中学校に行けたし、運動場では、野球、バレーボールなどの部活があっていた。しかし、中学生と一緒に何かをした記憶はない。越えてはいけな境界があったように思う。小学生にとって中学生は憧れの存在であった。



「愛する佐賀ん町」教育散策

S41卒 佐賀市東部支部 村岡智彦

佐賀ん町を愛して50年！おかげさまで、現在も佐嘉神社北周辺のネオン街を学生時代の記憶と重ね合わせながら、元気に散策する日々である。もちろん、通りのネオンや店の数、店内の様子は様変わりをしているが、裏通りに入ると学生時代の頃の酒場の雰囲気は今も大切にしながら、がんばっておられる店もある。家族的な雰囲気の中、カウンター内の経営者ご夫妻や隣席のお客さんとの会話に心癒されると同時に、情報収集の場にもなっている。

そんな佐賀ん町で、最近目につくのが、飲食店でアルバイトをする学生諸君(文化教育学部で学ぶ学生も含む)の多さである。最近の学生は、あるいは若者は、「礼儀作法がなっていない。」とよくいわれているが、出会うアルバイト学生の大半が、はきはきした明るい言動で接客してくれる。飲食店での接客業は、学生にとっては、礼儀作法を身につける最高の学びの場になっているのである。しかしながら、最近の若手教員や保育士に対しては少し気になることもある。私はここ2～3年、私立の認定こども園や私立大学に勤務する機会を得た。私たちの学生時代や若手教員時代と大きく違うところは、子どもたちの前でも、学生同士の集団討議の場においても、そして、保護者に対しても、堂々と自分の考え

を言えることである。これは、飲食店などにおける接客業のアルバイトや各種ボランティア活動への参加などが大きく影響しているものと考えられる。はきはきした言動は教師力の大事な要素の一つでもあるが、今、強く求められている「自分で考える力」や「チームで働く力」が、私たちの若い頃より弱いような気がしている。今、子どもたちの世界で起きている諸問題は多岐にわたっている。大人になって特訓されたはきはきした言動だけで解決できるものではない。今、最も求められているのは、子どもの頃からの積み上げによる思いやりと人間関係力なのである。今こそ私たちは、「教育の原点に返れ、さすれば明日が！」の先人のことばに注目したい。最近の若い先生や学生たちに不足している真の思いやりや人間関係力は、子ども時代に異年齢グループで活動をする「群れ遊び」や「共同作業」の体験不足からくるものだ、と私は思う。

学校現場にはどんどん新しい内容や機器などが入ってきている。新しい知識や技能を身につけ効果的に活用することも、大切なことであるが、不易な先人の教えに学ぶことも意義あることである。佐賀ん町にどんどんできてきている新しいお店、この新と旧がバランスよく混在するところに散策の楽しさがある。

ソフト面では、あの頃今言われているような小中連携はどのような形で行われていたのだろうか。小学生時代の自分には、知る由もないのだが。

地域の公民館から老人クラブの楽しそうな月例会の声が聞こえる。自分もその内その会に参加する年齢になるのだろうか、少子化の小中学生よりもパワフルで活気がある。これからは、まさに、シニアパワーの時代であると思う。耳を澄まして聴くと、カラオケが聞こえてくる。演歌が多い。やはり老人シニアには、演歌がしっくりくる

のであるが、今の若者が、その年代になる頃の老人クラブ月例会のカラオケは、AKBなどのテンポの速い乗り乗りの曲がかかるのだろうか？ひょっとすると、全員総立ちで踊っているのかな。

4月から生涯学習の手伝いを依頼され微力ながら、かかわっている。特にこれといった趣味のない自分であるが、いろいろな取り組みに参加し、この機会に、新しい発見をしてみたいと思っている。

江北支部便り

昨年12月、サガン鳥栖の取締役で、強化部長の永井隆幸氏を講師に迎え「サガン鳥栖Jリーグへの道そして今」と題してご講演をいただき、江北支部の総会及び懇親会を開催しました。J1の1年目で5位と大奮闘したチームの話は、会員一同興味津々に皆話聞き入って大好評でした。本部から宮尾会長様と前瀬戸口事務局長様にもご参加いただき、小さな支部のささやかな会に花を添えていただきました。今後も三夜待のような、会員の親睦を深める支部活動にしていきたいと思ひます。
(支部長：藤井裕明)





～30年目の日本舞踊
2013年発表会にて～

我が家の有朋会員

S 40卒 佐賀市北部支部

副 島 けい子

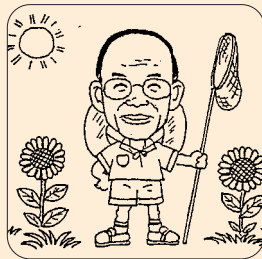
今年の10月24日で33回忌を迎える官治（舅父）の残してくれた永大家系記録をひらいた。家計図には、本人の直筆で詳しく記されていた。丁寧にきちんと書かれた文字は本人そのものを表している。

頁をめくると累代家長夫妻の照影の欄に本人の写真が貼ってあり、生い立ちなどが面々と綴られていた。そして貼り紙がしてあり、よく見ると新聞の切り抜きのようにも見える。「師範校入学者（本懸）師範学校に於ける本年度入学許可者左の如し第1部（男子40名）▲佐賀郡春日 副島官治」他に第1部女子40名の名前もあり、偶然にも、知人の伯母様の名前もあった。

数学に興味を持ち独学で検定試験に合格し、佐賀高校の数学の教師として定年後までも数学を愛した数学馬鹿と言えそうな人だった。舅母様も6歳下の卒業生だけど二人の性格の違いなのか資料はない。二人とも明治の教育を受けた筋金入りの教育哲学は後輩の私には大いに参考になったが、時代の流れとのギャップをたびたび感じることもあったけど懐かしい思い出となっている。また、有朋会誌が近所の小学生から届けられると会費も頼むという悠長な時の人たちで、会誌を喜んで懐かしく読み語り合っていたことも記憶に残っている。今回の原稿依頼を受けた時、我が身の置かれた廻り合わせに不思議さを感じた。

平成15年3月に38年間の教職生活を終えた時は凄く大変だったけど、私なりの達成感は忘れることはできない。まず、生み育ててくれた両親へ、ご縁があって第二の人生をともにしてきた周りの方へ、何よりも健康で過ごせたことへの神仏への感謝で心一杯になったことなど。退職して10年、古希を迎えた今も毎日が驚きの連続で世間知らずの旅は延々と続いている。退職後、「東北北陸二人旅」から始め、海外を含めた旅の中で元気を貰ったことばに励まされている。それは、レンタカーで巡る北陸二人旅の途中で石川県の総持寺の茶店に掲示されていたことばである。「五十、六十は花ならつぼみ、七十、八十は働き盛り、九十になってお迎えが来たら、百まで待てと追い返せ」

働き盛りと云う今、「南小路B（地区名）ふれあいサロン」を立ち上げ、「できる事からできる範囲内で進めよう」をモットーに協力員の皆さんとサロン事業に取り組んでいる。



退職して十年

S 40卒 神埼支部

平 田 英 次

平成15年3月に仁比山小学校を最後に38年間の教職生活を終え、10年が経ちました。

退職後私にとって大変ありがたい体験をさせていただき感謝していることが五つあります。

その第一は、退職直後、町や市の社会教育指導員の勤務に就き、仕事の上でどうしても必要に迫られパソコンを覚えたことでした。同じ職場の中に、パソコン通の職員さんがおられたことも大変ラッキーでした。現職中は、殆どの先生方がパソコンを駆使されている中で、私だけがワープロ使用者でした。パソコンを使えるようになったことは、私の退職後の生き方にプラス面として現在も少なからず恩恵を受けています。

二番目は、社会教育課にお世話になっていた時に、いろいろな企画の中で、ご縁で、たくさんのいろいろなジャンルの講師の方々との出会い、直接ご指導を受けることができたことでした。いろいろな知恵や元気をいただきました。

三番目は、平成19年からの人権擁護委員の仕事との出会いでした。これまでの自分の人権感覚が、いかに独りよがりの乏しく貧しいものであったかを恥じ入りながら、職務遂行にあたっています。自己啓発のチャンスを与えていただき、とても感謝しています。

四番目は、市の家庭教育支援チームの一員として、若いスタッフの中で子育て支援の仕事に携わる事ができたことでした。区長、元教職員、父親、祖父としての経験や立場を生かすことができました。

五番目は、地区のまつりごと（政）を掌握する区長の職に就いたことでした。現職中に、私自身もよく口にしていましたが「学校と地域の連携」や「開かれた学校」の重要性について、区長として見詰め期待した学校と、現職時代に教職員として見詰め期待した地域との間に温度差やずれや食い違いがあったことに、退職後のいろいろな仕事に携わる中で気づかされました。地域や家庭の実態を十分把握しないまま机上の企画実践に追われていた現職時代を遅ればせながら反省しています。

退職して10年、数々の貴重な体験に感謝しています。ほどよく社会や地域とのかかわりを持ち趣味もミックスしながら子や孫にも囲まれ、充実した日々を過ごしています。



人生の楽園をめざして

S54卒 小城多久支部 山 田 政 昭

今年3月末に長年務めた公立学校を定年退職いたしました。4月1日を迎えた時肩の重みがなくなり、若かりし頃の軽い体になったことを覚えています。ありがたいことに退職後も嘱託の仕事をしていただいています。月に17日間の勤務なので、これまで週に2日間あった休みが3日間になりました。

先輩方から「退職した後のことを早めに考えといたほうがいいよ。」とよく言われていました。しかし、これまでの週2日間の休日は仕事のための休日ではなかったのが実際のところで、とても退職後のことを考えるような余裕はなかったように感じています。ところが、これまで考えたこともなかったのですが、退職を機に残された人生の時間をいかに充実して生きぬくかということを考えはじめるようになりました。そして、これからの休日は、できるだけそのために使おうと考えました。すると、これまで退職したらあれもやりたい、これもやりたいと思っていたことが次々と湧き上がってきて、とても嬉しい気持ちにな

りました。時間をうまく活用して、いくつかのことを同時進行しながら生きていくのが苦手な私にとって、仕事をしながらやれることを一つずつ実現していくしかありません。

そこで、何から始めようかと考えました。それは、長年続けてきた野菜や花作りで、これまで出会ったりした、たくさんの方々に何か恩返しができないものかと思い、数百坪の山を拓くことからスタートすることに決めました。

できれば5年間ぐらいかけて、ローズとハーブの庭や果樹園を作り、まずは、おいしい果実と飲み物と庭一杯の花で、くつろぎの時間を提供できるようになればいいなと思っています。とはいえ、草を刈り、石ころを一つ一つ拾いながらの手作業なので、前途多難であります。なんとか形になるまでは、元気でがんばらなければという気持ちです。先日整地のすんだ数坪の畑に薔薇の苗木を仮植えをしました。人生の楽園作りのスタートです。



がんばれ！サガン鳥栖

H11院修 江北支部 藤 井 裕 明

佐賀に元気を贈るJ1チームサガン鳥栖。その強化部長である永井隆幸様の話昨年支部総会で聴き感動した。運営費は多額でJ1平均23億円。トップチーム浦和は60億円。サガン鳥栖は14億円。これでどう戦いぬくのか。

チームコンセプトはハードワークとチームワーク。相手1人に3人で攻守。運動量では負けない。これで負けた時はJ1降格。結果は5位。1年目としては十分な成績でした。

前身は鳥栖フューチャーズで1995年神埼に専用グラウンドを持ち、JFLチームとしては恵まれた環境でスタート。2年連続4位でJ1昇格を逃す。翌年春、スポンサー撤退でチーム存続の危機が訪れる。この時県民5万3千人の署名をJリーグに提出。特例で存続が決定し翌年ナビスコカップで浦和レッズと対戦。スポンサー名無しのブルーの上下で戦い、サッカーができる喜びを全身で現し、グラウンドを駆け回った結果0対0で引き分けた。永井さんは胸に熱いものを感じたと言います。その後も存続の危機は続き2003年44戦して僅か3勝、立派なスタジアムに観衆は2～3千人。その頃永井さんは、チーム運営、雑用、小学生の監督等、一人で何役もこなし、精神的、肉体的な困苦の中でしたが、各種チーム社長に励ましを受け、話のできる関係をつくらせてもらい、これが今の永井さんの大きな宝物になっているそうです。

2004年松本育夫監督が就任され、転機が訪れます。監督は選手に技術指導は勿論プロの自覚を植え付けました。選手は子どもたちに夢を与える存在なので子どもたちの手本になる必要があると説き、人前では背広にネクタイ、それに黒髪。金髪、茶髪、ピアスは禁止。そのおかげでチームに規律が生まれてきて、徐々に成績も上がり昇格への道が見えてきました。この時の熱血監督が岸野さんです。彼の教えはあきらめない、そして助け合うことでした。ファールで傷ついた選手がいたら、傷つけた相手を全員で囲めという指導でした。この教えの実践でチームワークは強固になった。

サガン鳥栖の名前の由来は、佐賀の者(さがんもん)と砂岩との掛け言葉です。砂岩に込められた意味は「年月をかけて、小さな砂粒が、大きく硬い岩になる」という思いが込められています。J1昇格まで一番時間がかかったチームにふさわしい名前です。時間がかかった分、少しずつですが硬い岩になってきているそうです。「更に硬く大きな岩になるよう精進します。応援してください。」と話を締めくくられました。話を聞き、更にサガン鳥栖のファンになりました。規律あるチームは強くなりますね。「学校もしかり。規律ある学校には、お互いを支え合い、たくましく生きる力を身につける子どもが育つ。」そんなメッセージをもらったように思いました。(江北町立江北小学校 校長)



ボールを蹴ると

S60卒 県庁支部 池田典穂

サガンとっす パン、パン、パパン！
サガンとっす パン、パン、パパン！！
鳥栖のスタジアムは、今日も応援で沸き返っています。

サガン鳥栖のホームゲームの日には、スタジアムに足を運び、試合を観戦するのが楽しみの一つです。ピッチ上は、サガングループが躍動し、緑の芝生の上をボールは命を吹き込まれたように動きます。私はいつもの場所から試合を眺め、一つ一つのプレーに一喜一憂し、あたかも自分がプレーをしているかのような気分になります。華麗なプレーよりも、自分が考えていたようにパスが通り、ゴールが決まると、もう、何ともいえない気分になります。勝ち負け次第でテンションは上下しますが、やはり、サッカーは楽しいものです。五十路を越えても休みの日には、シニアのチームでプレーをしているので「よし、明日の試合では藤田並みのパスを通してやろう。」なんて、帰りの車の中でイメージトレーニングをしている自分がいます。

中学校でサッカーを始めてから、かれこれ40年になろうとしています。未だにサッカーをやめ



～ 今も心はJリーガー ～

ようと思っことは一度もありません。学生の頃は、きつい練習でへとへとにな

ろうと、こてんばに試合でやられようとも、次の日にサッカーボールを蹴ると、気持ちはリセットされ、無心になって、また、ボールを追っていたように思います。若い頃は試合の中でもそれなりにプレーができていましたが、今では、走るスピードもキック力も、ボディバランスや判断力も衰えて、周りから見てみるとコメディのようなサッカーかもしれません。でも、楽しいのです。さらに、ボールを蹴ると不思議なことに、若かった頃の自分がよみがえってきます。確かに、イメージ通りに動けなかったり、ボールコントロールができなかったりして腹立たしく思うことも度々ですが、それでも爽快な時間を過ごすことができます。

チームには、自分よりもっと年を重ねた先輩がたくさんいます。動きは決して軽快とはいきませんが、試合前の練習では、誰もが昔の自分のイメージで楽しくボールを蹴っています。試合になると気持ちだけはJリーガー。体をぶっつけあうこともあります。ほちほちといったところでしょうか。そんなサッカー大好きなメンバーが集まって試合ができる幸せを感じています。お互いに怪我だけはしないように十分に体をほぐし、モチベーションを上げて試合に臨みます。

今でも、自分のイメージ通りのプレーが少しでもできるように、日頃からのプチトレーニングは欠かさないようにしています。いくつまでボールが蹴れるのかわかりませんが、「生涯現役」をめざしてがんばりたいと思います。ボールを蹴るとストレス解消、若かりし頃にタイムスリップです。
(佐賀県教育庁学校教育課 主幹)

武雄支部便り

総会は、2月9日、武雄の「八百重」で開催。

会順は、「開会・物故者への黙祷・支部長あいさつ・来賓の祝辞・本部報告・支部報告・佐賀大学学生歌斉唱」でした。

本部より宮尾会長様と西山副会長様にお越しいただきました。佐賀大学学生歌（昭和29年版）の作曲者、坂口清映先生の指揮で楽しく合唱するなど、総会はいつも盛り上ります。講演会では、日野原重明さんに師事した音楽療法士の大野真由美さんが、「音楽でも心に安らぎを」と題して楽しい時間を提供してくださいました。懇親会では、ひとしきり昔の話に花が咲きました。

(支部長：岩永 悟)



小城多久支部便り

1月26日に支部総会を開催しました。30名程の参加でしたが、小城市子ども支援センター長の別頭道明氏の「子どもたちの諸問題」の講演をはさみ、本部の宮尾会長様、吉木副会長様、瀬戸口前事務局長様と共に、和やかな懇親会でした。(前支部長：高上恵子)





サプライズ

S50卒 旧唐津支部 上 田 守

現職として最後となる、卒業式を翌日に控えた3月18日、六年生の修了式を行いました。六年生に谷川俊太郎さんの「とき」という詩を紹介し、「あすはいつでもあたらしい」という最後の言葉に込められた思いを一緒に考えて話を終わりました。

修了証書を渡し戻りかけた私に、六年生の一人が声をかけました。「校長先生、待ってください。私たちの感謝の気持ちを伝えたいのです。」

再び、六年生の前に立った私に、ある男子児童が、私との思い出を話し始めました。怪我をした時に、病院まで付き添ってくれたことを今も忘れないという内容でした。その後、全員でアンジェラ・アキさんの「手紙～拝啓十五の君へ～」の替え歌を歌ってくれました。最後は、くす玉を作ってくれていて、それを私が割るという内容でした。メッセージには、「これまでありがとう。いつまでも、お元気で。」と書かれていました。

思いがけない子どもたちからのプレゼントに、お礼の言葉を言って、帰りかけた私の前に、かつての教え子が花束を持って現れました。これには正直びっくりしました。実は、30年前に担任した子どもの中の一人が、今年卒業する子どもの母親でした。

「今年で校長先生は退職らしいから、皆で、サプライズを計画している。」と家で話をしたのを聞いて、自分たちも、それに乗っかれないかと、相談したようです。

30年も前の3月18日に卒業した、かつての教え子との再会には、思わず涙を流してしまいました。

定年退職をして、早、1ヶ月が過ぎました。今は月に15日間、嘱託非常勤として働いています。先輩方から「働かんといかんばい。」と言われていたことが、今そのことの意味が分かってきました。

おかげで生活のリズムを崩すことなく、緩やかに今の暮らしに慣れてきています。

これまでの経験を生かして、少しでもお役に立てるならと思ってお引き受けした今の職場は、先日花束を届けてくれた、教え子たちと共に過ごした学校の一階にあります。学校は19年前に統合合併して、今は、学校としてではなく、いくつかの団体に有効活用されています。しかし、来年には、取り壊される予定です。

時々、三階まで上がって、海を眺めます。再び、この景色を眺めていることに、不思議なご縁を感じています。



曲阜市親善訪問の思い出

H10院修 旧東松浦支部 牛 丸 和 人

かつて、多久市立東部中学校に勤務していた頃、多久市の姉妹都市である曲阜（孔子ゆかりの地）へ、子どもたちを引率していった際に、詠んだ短歌です。

- 大陸の星ちりばめし夜を駆ける 列車に子らの無事をねがわむ
- 孔廟のただありがたき大門を くぐりて遙かふるさと思う
- 孔林の木々の埃を洗うべく 優しく降りぬ銀色のあめ
- 仙人の住む地かここは真白にぞ 眼下は霞む泰山の雨
- 陽を浴びて深き緑の衣掛け 耀き建てり十三の陵
- 黄金の龍舞い踊る姿ぞと 長城眺む夏の日の午後
- 皇帝の衣の刺繍そのままに 柳垂るる北海の湖
- 王冠の宝石に似て耀けり 北京の夜の高層のビル
- 豊饒を願う姿の凜として 蒼き甍の祈年殿かな
- 若者が戦車に向かう映像の 験よぎりぬ天安の門
- 徴兵と並びて記念写真撮る 笑顔は同じ彼らも我も
- 金漆の番龍絡みて誰を待つ 大和の殿の玉座寂しき
- 銅鶴と銅亀は天を仰ぎ見て 漢白玉の欄干涼し





教育での地域づくりに参加を

S34卒 佐賀市西部支部 古賀 資之

平成9年、文化教育学部がスタートして16年が経過しました。平成9年頃から教職員の採用数が激減して、教育学部卒業生の採用が見通せなくなるのを見越しての改革でした。

その後の採用状況は、卒業生の数%という信じられない数です。佐賀県教育に果たした有朋会の存在価値も失われようとしています。そればかりか、明治中期から100年以上にわたって願正寺で続けられてきた、会員への追悼会も、細々と行われるようになり、卒業生の絆も、失われようとしています。

一方、社会の教育への要求は年々拡大し、教育実践の現場は、教育のICT化、多様化が進行し、ますます多忙化に拍車がかかり、肝心の子どもとのふれあいの時間を奪いつつあります。退職して16年、今も教育の現場と多少の関わりをもつ私にとりまして、有朋会の現状と教育現場に心を痛めています。

先日、NHKTVでオランダの学校教育を放送していました。教室に保護者が何人も来て、子どもたちの学習のお手伝いボランティアをしていました。日本もこのような開かれた教室で、のびのびと学習ができるといいなと思いました。工夫すればすべてを学校教職員任せにするのではなく、地域の人的環境を整え、学校教育を支援する体制が整えられるのではないかと思います。

グローバルに活躍できる人材の育成が叫ばれている中で、子どもが外で遊ばなくなった、といわれて久しくなります。クラブに所属して活躍する子ども

がいる一方で、ぼんやり一日を過ごしている子どもがいます。塾で勉強する子どもがいる一方で、分からないまま置いていかれ、ストレスを溜めている子どもがいます。教育の格差が開いたまま大人になる人を減らすためにも、教育に経験がある者が学校に出向いて、支援の手を差し向ける必要があるのではないかと考えています。

教材・教具を整える手伝い、図書館の整備・利用・読書の楽しさを感じてもらえる活動、授業や休み時間・放課後の指導や援助、安全の点検など、退職した有朋会会員が現職の方々と協力して、もっと、教育を充実させる手立てはあるのではないかと考えます。

このようなことは、現状では不可能かもしれませんが。教育行政の仕組みを地域づくりの視点から、規制を緩和してもらおうとか、学校ももっと地域に開かれたものになる必要があると思います。大切なことは、少なくなった子どもを元気にし、将来、地域や国を担って活躍する人材を育てることだと思います。

「人は、人によってなる」学生時代に習ったことばです。知識がいくら豊富でも、それを生かすのは人の知恵と意思です。それらは、直接、人の行動やことばを通してしか学ぶことができません。子どもをしっかりと育てることが、地域や国を良くする元と思います。



若い先生に期待する

S59卒 鳥栖・基山支部 庄 嶋 巖

失われた10年とか20年とかいう時代の中で、教育界では何度も大きく舵が切られた。90年代の初めに新学力観という考え方が打ち出され、生活科や総合的な学習の時間、外国語活動などの新しい教科や領域が創設された。情報化も凄まじいスピードで進んだ。他にも教育に関する様々な事象がファッションよりも早い周期でブームが到来し、過ぎていった。「教師は学び続けなくてはならない」のだが、学ばざるを得ない状況に置かれたと言ってよいだろう。教師たちは新しい

考え方や指導方法を取り入れようとみんな必死でがんばったと思う。「不易と流行」を教師は考えなくてはならない、とよく耳にする。それは発問や板書の技術や学業指導などはどう時代が変化しても大切であり、時代に合った指導方法を逸早く取り入れるべし、という意味で語られる。確かにその通りだろうが、それだけではないと最近考えるようになった。

若い先生の中にも素晴らしい先生がいるからだ。指導技術はまだ未熟であるのに、確かな



平成24年度佐賀県書写書道教育研究大会を終えて

S51卒 藤津・鹿島支部 永池 守

学生の頃は、佐賀大学学生書道研究会に身を置き、先輩や後輩と、古典の臨書や創作の作品づくりに、日夜励んでいた。教育学部や経済学部さらには農学部や理工学部の部員が、60名を超えて在籍し、かなり多様性に富んでいた。今となっては、懐かしい思い出である。恩師、土肥春嶽先生の柔らかな眼差しと鋭い指摘を思い出す。平川朴山先生、太田香雲先生、山口流水先生、渡辺松坡先生からも直接筆を持ってのご指導をいただいた。大分の九重合宿や佐賀の高伝寺座禅合宿では、6時起床で朝の練習が始まる。夏に半切を書く時は、汗が滴り落ちて苦労したものだ。夜は、10時までの練成会。朝から夜まで書きっぱなしであった。新入生の頃は、寝るとき膝が痛くて、擦りながら床に就いたことを思い出す。

それから37年が過ぎた。平成24年度は、佐賀県書写書道教育研究会の鹿島藤津地区大会があり、奇しくも、佐賀県教育研究会書道部会の会長を仰せつかり、佐賀県書写書道教育研究大会を行ったところである。これまでに、書写教育部会で育てていただいた面がたくさんある。

さて、昨今は、「手書き文字が今の時代に、いかに大切か」ということがよく言われる。子どもたちは美しく整った文字を書きたいと思っている。また、手書き文字を見て、きれいだなと思う情緒性もある。しかし、子どもたちは、鉛筆の握り方や姿勢が文字の書き方に大きな影響を持っていることを、なかなか意識できていない。我々教師側も、姿勢や鉛筆の

握り方をいつも意識させて書かせているとはいえない。

また、学校の現場では、電子機器を使つての利便性の追求も必要だが、そればかりだと情緒性は培われないのではと危惧する。教育が人格の完成をめざすのであれば、両方が培われなければならないのではないか。

東日本大震災のあと、年賀状を出そうという人が増えている、という報道がなされた。記事の中には「新年を迎えるにあたり、文字を書いて人に思いを伝える。大きな災害を体験し、人と人との繋がりがいかに貴重であり、かけがえのないものであるか。一言、ことばを書き添える。できれば筆で書きたい。そんな思いで年賀状を書いた人も多い」と書かれていた。

子どもの時から手書き文字の感覚や毛筆で書くことを体感させておく。ワープロや画面タッチで文字を書く時代だからこそ、文字を書く楽しさを体感させる教育が重要になってくる。文字を書く教育をさらに進めることが、子どもの表現力を豊かにし、理解力を高めることにもつながると考える。

平成24年度佐賀県書写書道教育研究大会を「新学習指導要領に対応する書写書道教育のあり方」の大会テーマの下開催したが、その成果は今後の実践の結果次第に待たれるところである。これまで、先輩方から受けたご指導を、少しでも後に続く者たちへ伝えることができたかと自戒する。

(鹿島市立七浦小学校 校長)

学びが展開されている。何だろう？何がこの若者を先生にしたのだろうか。思えば先輩にも同僚にも素晴らしい先生は昔からたくさんいた。「授業がうまい」だけではない。別の何かがある。子どもが安心して教室で学ぶ雰囲気醸し出す何か。

私はその何かを「子どもに寄り添う力」ではないかと考える。教育相談的な意味合いだけではない。教材研究をするときも、子どもと会話しているときも、授業時間そのものも、「子どもに寄り添う力」が必要なのだと思う。教師に必要なとされる資質や能力は様々に提言されるが、突き詰めるとこのことが最も大切で、まさに、不易の部分ではないだろうか。

本県でもこれから大量退職の時代を迎え、たくさんの若い先生が採用されることになる。若い

先生を立派に育てることが喫緊の課題だ。これからの厳しい時代に生きる子どもたちを教育することは、並大抵のことではない。

「子どもに寄り添う力」が不易の部分であるならば、全部の先生に備えて欲しい。私たちに課せられている使命は重い。なぜなら、その力というのは、「素質」とも言えるものであるからだ。何かの研修会で身につくようなものではなく、これを身につけることは簡単なことではない。

しかし、私たちがそれぞれの力を結集して、全ての若い先生方に、この「素質」を注入して育ててこそ、子どもたちの未来がぐっと明るくなり、この国の展望が開けてくるのではないだろうか。

厳しい時代に教職をめざした若い先生方に対する期待は、膨らむばかりだ。

(鳥栖市立田代小学校 校長)



上海の職業技術学校との交流 ～グローバル人材の育成～

S54卒 県立学校・私学支部 岡 陽 子

平成25年3月に私の勤務校の生徒20名が、上海市にある国立の上海職業学校を訪問しました。大気汚染が心配される中での訪中でしたが、上海市の同年代の高校生と交流し、日本のアニメに関心を持っている学生が多いことや生活習慣の違い、充実した施設設備、衛生環境の違い、調理技術の高さ、熱烈歓迎に驚いたことなど、中国の状況について一人一人が異なる感想を持って帰ってきました。

今回の交流は、佐賀県国際交流課のグローバル人材育成事業の一環として行われたもので、目標は海外の高校生との技術交流や文化交流を行うことにありました。ただ、交流をはじめるとは、本校と同様の服飾や調理を学ぶ学校が中国にあるのかもわからず、手探りのスタートでしたが、国際交流課スタッフの全面的支援や中国の対外友好協会や佐賀県上海デスクのご協力のおかげで該当校が決まり実現できました。途中、尖閣諸島の問題もあり連絡もスムーズにできない状況も生じましたが、最終的に当該校では大歓迎をしてもらい、新聞やテレビ等の報道から得られる中国の印象とは異なる状況にあることを感じました。「百聞は一見に如かず」生徒も引率者もそのことを感じたと思います。

平成23年度10月に策定された「佐賀県総合計画2011」には、国際社会で活躍する人材育成のための留学支援施策を充実する方向が示されています。本交流もその一環としてスタートしたわけですが、中国で調理や服飾技術など同じ内容を学ぶ高校生と交



（熱烈歓迎に驚き）

流し、中国で活躍する人材を多く輩出した、中国有数の職業技術学校を訪問した体験は、生徒自身の視野を大きく広げてくれたと確信しています。

折りしも、今年度から高等学校では、新学習指導要領がスタートし、英語の授業では、教師が英語を使って授業を行うよう改訂されました。高校では、教師や生徒が英語を使う授業を通して、生徒のコミュニケーション能力を育む授業に変わりつつあります。

本校でも、英語の授業の活性化や海外の高校生との交流を通して、グローバル人材の育成を目指したいと思っています。このことが、日本文化とともに異なる文化や生活を尊重する心を育て、異文化を体験した卒業生が、将来、県内企業や地域社会の活性化に必ずや貢献してくれるものと考えています。

（佐賀県立牛津高等学校 校長）



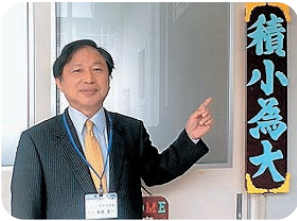
伊万里の地に三度赴任して ～豊上学習からの出発～

S59卒 伊万里・西松浦支部 光 岡 民 夫

今年度から伊万里小学校へ赴任した。三度目の伊万里市への勤務となり、つくづく、伊万里との縁を感じている。

昭和60年4月、新採として伊万里養護学校へ赴任した私は、訪問教育担当となった。様々な事情から学校への通学が困難な4人の子どもたちの家庭を週2回訪問し生活を基盤にした学習や機能訓練、散歩などを行った。県西部を回り、学習の場である教室は豊の上。小黒板を運び込み「今

日は、〇月〇日〇曜日です。」という勉強をしたことが懐かしい。新米教師で右も左もわからない私の訪問を毎回笑顔で迎えてくれた子どもたちから一番感じたことは、「当たり前ではない。ありがたいのだ。」ということだった。私たちが日頃当たり前のこととして考えていることは、すべて「ありがたい」ことなのだった。学校へ行くことも、教室で勉強することも、勿論。それを教えてくれたのが、訪問教育の光岡学級の子どもたち



「夢と希望を育む」学校づくりをめざして

S51卒 三養基支部 篠原 英 一

三根東小学校は小規模校であるが、家庭や地域は、学校に対して大変協力的で学校・家庭・地域が一体となった教育活動が特色である。学校教育目標と今年度の重点目標で、本校のあゆみをご紹介します。

本校の教育目標は、「夢にチャレンジ東っ子」である。第1重点目標は、学力向上である。校長室の廊下に「積小為大」のこぼしを掲げ、機会あるごとに児童に話をし、一日一日、一時間一時間の学習をがんばるように声かけをしている。

昨年度11月に、本校で三養基地区教科等授業研究会が開催され、低・中・高学年の各部会で、授業公開を行った。研究授業をめざし職員や児童が、共に「積小為大」の心でがんばり、参観者の高い評価を受けた。また、家庭に「家庭学習のころえ」を配布し、読書月間で「うち読」の取り組みを進め、家庭と連携して基礎学力の定着と活用力育成を図って学力向上をめざしている。

次に、キャリア教育・道徳教育・特別活動の充実と生徒指導の強化である。キャリア教育に取り組み、全児童の「僕の夢・私の夢」を廊下などに掲示した。夢と希望を育み、何のために勉強をするかという目標を持たせ、地域の方々と深く関わるキャリア教育を通して、郷土のよさや自然を愛する豊かな心を育み、人生に目標を持ち、たくましく生きようとする意欲や態度を育てたい。

また、道徳の授業時数の確保と充実を図り、家庭と連携をした、生活習慣の形成と生徒指導の充実を

図っている。命の月間では、全校朝会で命の話をして、命を大切に作る取り組みを集中的に行い、毎月お誕生会給食を開き、楽しい会食で心の交流を深め、命の大切さを考えさせる取り組みも行っている。本校で脈々と受け継がれてきた「命について考える日の集会」は、68年前に起こった「天建寺渡し船転覆事件」で犠牲になった児童の命日に開き、児童のみならず保護者や地域の方々と共に命の大切さを考える特色ある集会となっている。

第3は、健康安全教育の徹底強化である。地域や家庭と連携し、健康安全教育の徹底強化を図り、安全安心な学校をめざしたい。

第4は、人権同和教育、特別支援教育の推進による差別の無い支えあう学級、学校づくりである。教育相談の充実を図り、人権教育を推進し、いじめや差別の無い学校づくりをめざしている。気になる子について職員会議や連絡会等で情報を共有し、全職員で育てる体制づくりに努めている。

最後に、地域に開かれた学校づくりをめざして、地域や保護者の皆様と連携し、毎日更新しているブログや学校便りで学校の情報を積極的に発信し、地域に開かれた学校づくりをめざしたい。

小規模校のよさを生かし、学校・家庭・地域が一体となり、教育目標の具現化と児童の夢と希望を育む学校づくりをめざし、「積小為大」の精神で、全員で心をつなげて、日々努力しているところである。

(みやき町立三根東小学校 校長)

だった。

6年間勤務の後、3年間の小学校勤務を経て、再び、伊万里養護学校へ戻った。「本人参加と自己決定」をキーワードに本物の生活を経験し、生活する力=生きる力を高めるため、校外学習へも積極的に出かけた。知識や技術を学ぶ場と使う場を一体化した学使一体型学習の実践である。乗り物の利用、買物、食事へ出かける度に、地元伊万里の方々の優しい眼差しや温かい心に触れ、何度もありがたいという気持ちにさせられたものだ。伊万里の方々の気持ちがこんなに温かいのはなぜかという疑問に対し先輩からは、「この子らの心が美しいからだ。この子らのすばらしさが廻りの人々を育てているんだよ。」との返事が返ってきた。勿論、子どもらの素晴らしさを感じ

じされる素地を、地元の人が持っておられてこそというのは申すまでもないと思った。10年ぶりの伊万里の地で主幹教諭として育友会の皆様を中心に、地域の窓口としての仕事をさせていただき、三度伊万里の心に触れ、大いに感謝している。毎日子どもたちの登下校を見守ってくださる数多くの地域の方々、子どものためにと行事や会議にでてきていただく多くの育友会の方々。職員室も校長・教頭先生を中心にガチッと纏まっており、「チーム伊万里」としての雰囲気漂っている。これらのありがたい状況に答えるべく、伊万里を愛し、ありがたさを忘れず、ありがたさに満足することなく、日々精進していきたい。

I Love Imari!

(伊万里市立伊万里小学校 主幹教諭)

本 部 便 り

平成25年度活動予定

総会・懇親会は？

期日 平成25年8月31日（土）

場所 グランデはがくれ

受付……13：00～
 総会……14：00～14：30
 講演会……14：40～15：40
 懇親会……15：50～17：50

- ・会費 3,000円 各学校委員や支部長へ申し込む。
 - ・本部へはFAX（0952-25-5700）で。当日申込可也。
 - ・会費は学校委員に前納するか、当日受付にて。
- ※講演会講師は、富吉賢太郎氏。
 ※今年度のお世話担当は、昭和58年度卒の皆さん。

追悼会は？

期日 平成25年11月17日（日）

場所 願正寺

受付……9：30～
 追悼会……10：00～11：00

- ※明治24年「総集会」として発足し、本会最大の年行事として継承。
- ※明治26年当時の全会員128名の浄財で願正寺の一隅に石碑を建立し、全会員参加による追悼会が開催され現在に至る。

平成25年度 有朋会本部支部 行事予定

月	日	本部・支部行事	備考	
1	月	教職員異動新聞発表	異動報告は10日まで	
4	10	水	第1回正副会長会（18：00～）	代議員名簿締切
	13	土	第1回本部役員会（18：00～）	採用試験支援開始 4月17日、24日
	18	土	第1回支部長及び事務担当合同会議（10：00～）	採用試験支援 5月15日、20～24日
5	31	金	会報32号執筆者締切り〔2月に原稿依頼済〕	
	6	木	会報32号 編集会議（2回校正）	採用試験支援 6月5日、19日
	12	水	58卒世話役の依頼	
6	14	金	各支部会報部数調査締切	
	20	木	第2回正副会長会（18：00～）	
	27	木	58卒世話役の打ち合わせ	
	1	月	喜寿、還暦、感謝状 締切	採用試験支援 7月1日～19日
7	10	水	本年度の物故者、喜寿、還暦対象者の確認依頼	退職含む会員調査締切
	11	木	会報32号 発送開始	
	11	木	第3回 正副会長会	
	中		喜寿祝賀該当者、感謝状受賞者決定	
8	26	金	会員数調査 締切 会費＝月末締切	現職の会費納入締切
	1	木	懇親会参加申し込み 締切	採用試験支援 7月29日～8月9日
	7	水	第1回学部懇談会（学部課程代表）（18：00～）	採用試験支援 8月19日～8月23日
	31	土	総会・懇親会13時 グランデはがくれを予定 直前打ち合わせ 58卒 12時集合	講演あり
9	12	木	第4回正副会長会（総会反省会）	
	18	水	採用試験支援反省会 キャリアセンターと講師	
	27	金	平成25年度追悼対象者報告 第1次締切	退職会員の会費納入締切
	3	木	第5回正副会長会	
10	18	金	平成25年度追悼対象者報告 最終締切	
	26	土	本部役員会	
	16	土	願正寺との打合せ及び前日準備 事務局	佐賀県青春寮歌祭
	17	日	追悼会（願正寺）	
11	5	木	第6回正副会長会	
	15	水	第2回学部懇談会（学部課程代表）（18：00～）	未納会費の納入締切
	2	土	第2回支部長及び事務担当合同会議（10：00～）	
	24	月	佐賀大学卒業式・祝賀会	
3	27	木	監査	

会費納入へのお願い

※会費納入は、基本的に下記の要領で！

特別会員（師範学校卒業）の方は免除。
 会報が必要な方は、校区小学校の学校委員に連絡を。

【1】県内学校勤務の会員は？

学校単位で徴収し、支部の事務局へ納入。

【2】県内のご退職の会員は？

校区の小学校に持参するか、同封伝票で。
 金額は地区により異なるので確認を。

【3】県外会員の方は？

各県の事務局へ納入。年会費は、1,300円。
 福岡県は支部費を含み、2,300円。
 新規納入の方は同封の伝票で。

【4】卒業後6年経過の会員は？

県内在住者は、上記1、2の方法で。
 県外在住者は、別添振込み用紙で、郵便局口座に納入。

※佐賀大学美術館への資料請求お問い合わせ先

国立大学法人佐賀大学美術館設置事業窓口
 TEL(0952)28-8118へ一報を！

32号

発行日 平成25年7月1日（月）
 発行者 有朋会会長 宮尾正隆
 編集者 編集部長 山口久美子

住所 〒840-8502 佐賀市本庄町本庄1
 佐賀大学菱の実会館 TEL 0952-23-1253
 E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
 HP http://dousou.ext.saga-u.ac.jp